The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	日本語学習者のチュートリアルにおけるあいづちとその周辺 : フォローアップ・インタビューによる談話分析を中心に
Author(s)	今石, 幸子
Citation	阪大日本語研究. 1998, 10, p. 111-127
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/5763
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

『阪大日本語研究』10（1998）

日本語学習者のチュートリアルにおける あいづちとその周辺

－フォローアップ・インタビューによる談話分析を中心に－

Backchannels in Japanese One-to-one Tutorial Conversation

－Discourse Analysis by Follow-up Interview －

今　石　幸　子

IMAISHI　Sachiko

キーワード：あいづち，リピートの繰り返し，沈黙，意図や解釈の違い
発話権獲得，フォローアップ・インタビュー

1．はじめに

コミュニケーションが支障なく行なわれる背景には、参加者間に、ある規則が存在するとし、自然かつ円滑に行なわれている会話資料を分析してその解明を試みた研究がなされてきた。(Dittmann & Llewellyn (1968), Yngve(1970), Duncan(1972)) 本稿は、コミュニケーションに関わる様々な要素のうち、あいづちに焦点を絞り、日本語母語話者（NS）と日本語学習者（NNS）の談話資料を、会話後のフォローアップ・インタビューをもとに、分析したものである。

2．先行研究

日本語のあいづち研究は、談話資料の一例をあげて経験的にあいづちの

重要性を指摘したもの（水谷1983,1984,1988,ザトラウスキー1989）から、あいづち使用の実態や諸特徴について談話資料を基に論じた研究へと移行した。談話資料の対象となる被験者は、いくつかの組み合わせに分かれ、母語話者同士（松田1988,今石1993a,b等）、非母語話者同士（堀口1997等）、母語話者と非母語話者の接触場面（松田1988等）が扱われてきた。しかし、例えば、母語話者同士の談話資料から得られた結果を比較しながら、他の場面（非母語話者同士あるいは、母語話者と非母語話者による談話）を分析した研究は、まだ十分になされているとはいえない。

Maynard(1997)は、母語話者同士の談話分析結果と、母語話者と非母語話者の談話分析結果を比較しながら、あいづちの頻度・機能などを考察している。Maynard(1997)が使用した資料は、日本語母語話者同士による日本語での談話、英語母語話者同士による英語での談話、英語母語話者と日本語母語話者による英語での談話で、結果として、日本人のあいづちの多さや、あいづちを挿入する箇所の違いなどを指摘している。

本稿は、あいづちを中心にして、母語話者同士の談話資料から得られた結果（今石1993a）と、今回、録音した母語話者と非母語話者による日本語での談話資料を比較し、いくつかの相違点を示した。また、先行研究では、あいづちの使用実態に注目し、使用意図について触れることがほとんどなかったことをふまえ、フォローアップ・インタビュー（注１）で得られた被験者の内省を考察に加えることにした。

３．談話資料について

使用した談話資料は、日本語母語話者の大学院生(以下、NS)と非母語話者の台湾人研究生(以下、NNS)によるチュートリアルでの１対１の対話である。チュートリアル制度とは、日本人大学院生がチューターとなり、担当の留学生の日本語や研究の指導を１対１で行なうもので、来日したばかりの留学生を対象に、１年間続けられる。チュートリアルの場面を選んだ理由は、学生同士なので、お互い接しやすいのではないかということと、

調査協力を頼みやすいこと、追跡調査のしやすさからである。

被調査者について、NNSは、録音時(1996)、日本滞在歴が１ヶ月半で、日本人との接触は、「家主や近所の人とあいさつをしたり、ときどき研究室で日本人学生と話したりする程度」と語っている。来日する前に、「日本人とのコミュニケーションの経験は、ほとんどなかった。」と言い、まだ、日本人と会話をした経験があまりない時期であった。

NNSが母国で受けた日本語の授業（大学で４年間）については、「文法、作文、会話のクラスがあり、授業のほとんどを台湾人教師が担当した。文法クラスでは、学生の質問を受けながら、教師が中国語と日本語を使って文法を説明し、指名された学生が文を読むという作業の繰り返し。会話クラスでは、学生同士のペアワーク中心だった。」と述べている。

全体の録音時間は９０分で、うち前半の３０分を資料とした。チュートリアルの内容は、現代日本語文法についてで、テキストは、寺村秀夫著『日本語のシンタックスと意味Ｉ』を使用している。録音したチュートリアルは、第１回めであったが、NSとNNSの面識は、すでにあった。

４．分析と考察

4.1. あいづちの形式と使い分け

あいづちの定義は、メイナード(1987)を参考にし、「話し手が発話権を行使している間に聞き手が送る短い理解表現である」とする。(今石1993b)

まず、あいづちの形式の異なり数であるが、今石(1993a)の調査では、母語話者30人の電話での会話（母語話者同士,所要時間：1～6分）で、一個人が使用するあいづちの異なり数の平均値は、6.6であった。堀口(1997)の調査では、上級学習者14人の１対１での会話（学習者同士,所要時間：11～19分）の平均値は、13.6であった。今回使用した資料では、NNSの使用したあいづちの異なり数は、８であった。

あいづちの定義は、研究者間で若干異なるため、単純に比較することは

できないが、堀口(1997)が「上級学習者は日本人と同じように何種類かを使い分け、1つのあいづち詞で押し通すということはないといえる。(p. 214)」と述べる通り、NNSは、日本人とのコミュニケーションの経験が少ないにもかかわらず、いくつかのあいづちを使い分けていた。

NNSが使用したあいづちの具体的な形式は、「んー」「はい」「はいはいはい」「あー」「そうです」「そうですか」「そうですね」「あー　はい　はい」で、これらは、「はい」「あー」「んー」「そうです（か・ね)」の組み合わせと繰り返しである。

使用した各形式について、NNSに詳しく尋ねてみると、母国の日本語授業で習った形式は、「はい」「そうです」「そうですか」であった。習わなかった形式「んー」「あー」を使用した理由を尋ねると、「「んー」は、英語の「mm hm」のようなものとして 中国語でも使うので、無意識に使い、「あー」は、「はい」に似ているから使ってもいいのではないかと判断して使った。」と答えた。さらに、他の形式で、何か知っているものはないかと尋ねたところ、NNSは、思いつかなかったが、インタビューから、「なるほど」という語も知っていたことがわかった。また、各形式の使い分けについて、NNSは、「特に意識していないが、チュートリアルの前に、NSが「うん」を使わない方がいいと言ったので、「うん」を使わないで、「はい」を使うよう心がけた」と述べている。

以上の結果から、NNSが使用した形式の出所は、以下のように整理することができる。

(1)母国の日本語授業で学習：「はい」「そうです（か・ね)」

(2)学習者の判断で使用：「んー」「あー」

(3)母語話者から習得：「うん」を使わない方がいいこと

(2)では、「(a)母語の使用」、「(b)目標言語に関する知識からの使用」が見られ、(3)では、「(a)母語話者からの教示」があったが、日本人とのコミュニケーションを通して、「(b)母語話者との会話からの自然習得」も現れるであろう。どのような形式が観察されるかについては、今後、追跡調査を行ないたいと思う。

4.2.　情報の流れとあいづち

あいづちの形式は、話し手の情報提供の進行状況に応じて使用される。つまり、聞き手は、話し手の意図（あるいは伝えたい情報が何かということ）を確定していない間は、「はい」「えー」「んー」など、聞いて理解していることを示す表現形式(資料1, (1))を使用するが、意図を確定すると、「あーそうですか」「そうですね」など、意図に対する聞き手の態度を表明する表現形式(資料1, (2))を使用する。(今石1993a,p.40)。

医者　：超音波とかですねー　　まっ　そういう検査もお受けになってお
相談者：　　(1)はい

医者　：いた方がいいだろうと思います。
相談者：　　(2)あーそうですか

資料1　情報の流れとあいづち（母語話者同士の会話）

NS　：.....地球は丸いとかね　　あっ　地球が丸いとは言わないでしょ
NNS　：　　はい　　(笑)

NS　：　　だから　そういう.....
NNS　：そうですね

資料2　情報の流れとあいづち

NS　：「太郎が」とか「その犬を」とか「トムというもの自体を」も
NNS　：　　はい

NS　：補足語を考えてください
NNS　：　　はい　そうですか

資料３　情報の流れとあいづち

このような情報の流れに沿ったあいづち使用は、NNSにも確認された(資料２,資料３)。ただし、使用した形式の中には、今石(1993a)の資料で、母語話者が使用しなかった形式も観察された。例えば、母語話者同士の会話では、「あーそうですか」「はーはーそうですか」は観察されたが、資料３でNNSが使用した「はい　そうですか」は、観察されなかった。NNSが「はい　そうですか」を使用した背景について、「考えて下さい」に対して、「はい」と言い、NSの説明全体に対して、「そうですか」と言ったのではないかとも考えられるが、NNSへの確認は、まだ行なっていない。

4.3.　あいづちの代わりにNNSが使用した様式

母語話者同士の会話であれば、あいづちが打たれるであろう箇所で、あいづちが使用されなかった場面に焦点を当て、代わりに何が起こったのかを分類した。まず、あいづちの代わりに、リピートを繰り返すパタンが観察された。

4.3.1.　リピートの繰り返し

堀口(1997)によると、母語話者同士の会話で、リピートは、「機能的にはあいづちと考えられ(p.63)」、聞き手が「話し手の発話の中で特に関心を持った部分(p.64)」に現れ、「驚きや理解の信号を送ることもできる(p.65)」と述べている。

一方、NNSがリピートを使用した意図は、母語話者の場合とは、少し異なっていた。いつリピートをしたかについて、NNSは、インタビュー

で、次のように答えている。

(1)「NSと一緒に本を読んでいるとき」(実際には、NSがNNSに一緒に読みましょうと誘っているのではなく、NSが説明のため、本の文章を引用して読み始めたとき)

(2)「NSの発話した語を確認したいとき」

つまり、NNSがリピートを使用した意図は、母語話者のように、内容に対する関心の高さを示すのではなく、聞き取った語を確認するためであった。母語話者であれば、「はい」「えー」「んー」など、聞いて理解していることを示すあいづちを挿入する箇所で、NNSは、聞き取った1語1語を確認するためにリピートしているのである(資料4)。

NS　：だから　格助詞とか　引用の助詞だけを　補足語って言うのでは
NNS　：　あー

NS　：なくて　そ　もう「太郎」とかが　agentは、主、えーと
NNS　：　ではなくてー

NS　：動作主とか　んー　訳すことが多いですねー　それから
NNS　：　はい　動作主

NS　：themeが対象　で　えーと　goal　が到達　だから　これは　例え
NNS　：　対象

NS　：ば　I gave her a book　で　えー　だから....
NNS　：

資料4　あいづちの代わりにリピートを繰り返すパタン

4.3.2. 沈黙

あいづちをあまりうたない学習者に対し、日本語教師が同じ説明を繰り返したという実例を、ザトラウスキー(1989)が紹介しているが、今回の資料でも、NNSがあいづちをうたなかったため、NSが説明を繰り返した場面が観察された（資料５）。

NS　：NNSさん　よかったら　私２セット　持っ　あの上巻と下巻で

NS　：あわせて　４千円いくらか　５千円近くになると思うんですけど

NS　：私が　２割引きのときに買った本が２セットあるので　そのうち

NS　：１セットよかったら　あのー(1)おわけしますけど　いいですか

NS　：あのー今度　私　国語学会にね　今週の日曜日行くからー　その

NS　：ー　国語学会　学会のときにね　本２割引で売ってる本屋さんが

NS　：あるんですよ　から　それで　よかったら　買ってきますけど

NS　：　　本　本です　　ちょっと　分厚い
NNS　：この (2)辞典？　本？　　あのー　本は　あのー　２冊に

NS　：です　上巻と下巻にわかれてます　　上巻と下巻で　２冊　その
NNS　：　　上巻　あー　　はい

NS　：上と下　一緒に買ったとしても　4千円何百円かで　5千円まで
NNS　：　　はい

NS　：はいきません　　2セット
NNS　：　　今　あのー　NSさんは　うちに

NS　：持ってます　上下　上下　全部で4冊持ってます　それはねー
NNS　：　　上下　上下　　あー

NS　：実は　そのー　私が大学時代に　お世話になった先生に　あのー
NNS　：　　はい　　あー

NS　：プレゼントしようと思って　買ってて　送ってないんですけどね
NNS　：　　あー　　はー

NS　：何か　それで　あのー　NNSさんの方が　お急ぎだと思うので
NNS　：　　そうですか

NS　：よかったら先におわけしますよ (3)ということです
NNS　：　　はい　　はい　　はい　お願いします

資料5　NNSの沈黙とNSの反応

資料５は、母語話者であれば、あいづちを打ったであろう部分で、NNSの反応がほとんどなかった箇所であるが、この文字化した資料と、録音テープから、NSとNNSに、そのときの様子を思い出してもらい、それぞれの行動に至った背景を尋ねた。

まず、NSは、「NNSの沈黙が気になり、沈黙の理由を次々と類推し、一生懸命、説明を試みた。」と答えた。NSが類推した内容を順に示すと、次の通りである。

(a)NNSが「セット」という語の意味がわからないのだろうか
(b)自分が勧めている本の値段が高いとNNSが感じているのだろうか
(c)NNSに本を売ることで、NSが金を稼ごうとしていると誤解されているのではなかろうか

資料５にあげたNSの発話を見ると、(a)から(c)へとNSの類推が移行している様子がうかがえる。また、類推した順序に注目すると、はじめは、日本語の意味が理解できていないのではないかというNNSの語彙能力に原因を求め(a)、NSの勧めている物(b)、NS自身の行動(c)へと対象が移っている。また、インタビューで、NSは、(c)の段階では、「金儲けをしたいわけではないという説明に必死だったため、(3)「ということです」(資料５の最後）を付け加えてしまい、不自然な終わり方をした。」と沈黙に対して動揺があっとことも述べている。NNSの沈黙に対するNSの反応については、さらに、NSの発話の背景となる意識を詳しく探ることにより、類推の特徴や推移の傾向が出てくるのではないかと思う。

次に、沈黙しているNNSであるが、NNSが沈黙した理由は、NSの類推(b)、(c)とは異なり、話の内容が理解できていなかったからであった。まず、(1)「おわけします」という表現が初出で意味がわからず、続く、「国語学会で本を買ってきましょうか」という話の流れも、わかっていなかった。NSの類推(a)に関して、「セット」という語の意味は知っていたが、トピックが何かは理解していなかった。そこで、「「セット」という語が出

てきたので、話題が「本」なのか、それとも、その前に話していた「辞書」なのかを確認したくて、(2)「辞書？本？」と尋ねた」と述べている。

ザトラウスキー(1989)があげた例では、学習者が教師の発話内容を理解しているにもかかわらず、あいづちを打たなかったため、コミュニケーションがうまくいかなかったケースだが、資料5の場合、NNSがNSの発話内容を理解していなかったこともあり、NNSの沈黙の理由、沈黙に続く発話意図、沈黙に対するNNSの類推に、食い違いが生じ、より複雑な構造をなしていたことがわかった。

4.4.　あいづちが打たれた情報に関するNSとNNSのずれ

「あ　はいはい」というあいづちは、資料1の「(2)あーそうですか」と同じく、「話し手の発話意図を確定し、聞き手の態度を表明する形式」であり、その機能は、「知識の共有（松田1988 p.62)」を示す。

資料6でNNSが「あ　はいはい」を使用しているが、フォローアップ・インタビューの結果、「あ　はいはい」がどの情報に対して使用されたかについて、NSとNNSの間に、ずれが生じていたことがわかった。NSは、「森田良行氏が書いた本は『＊＊辞典』である」という内容を言った直後に、あいづちが現れているので、その情報に対して打たれたあいづちだと解釈していた。ところが、そのときNNSは、「頭の中で、「森田」という名前を言ってはみたものの、下の名前が思いだせないでいた。そこへ、NSが「森田良行」と言ったので、「良行」という情報に対して、あいづちを打った」と言うのである。

表面上は、NNSのあいづちが母語話者のパタンにはまっていて、不自然さは感じられないが、フォローアップ・インタビューによって、両者の解釈が全く異なっていたことがわかった。この結果は、あいづちを談話分析から考察する際、話者の意図も確認しなければならないことを示唆している。

NS　：あのー　類　日本語類義表現の文法　ありますよね　えーと　知り

NS　：ませんか　その本のことは　先生の本
NNS　：　類義　表現　先生の　あの

NS　：じゃなくて　……あの　みんなで作った本　いえ　違います
NNS　：　先生のじゃ　ま　森田

NS　：それじゃないです　それはねー　それは　＊＊＊辞典
NNS　：　類義語じゃない

NS　：＊＊＊辞典です　森田良行さんの　あのー　ここの
NNS　：　＊＊　あ　はいはい　＊＊

資料6　あいづちが打たれた情報　（＊＊：聞き取りにくかった箇所）

4.5. 発話権獲得の手段

発話権獲得について、NNSは、インタビューで、「NSの話すスピードが速く十分なポーズがないので、発話権がとれない。また、言いたいことはあるが、日本語がなかなか口からでてこない」と述べている。

日本語母語話者は、発話権獲得の手段の1つとして、あいづちと類似する発話権要求シグナルを使用し、話者交替の実現へと働きかける。これは、話し手の発話を促すあいづちとは異なり、話し手の発話の終わり（または区切り）を待たず早めに打たれたり、強めに目立つように発せられたりする（今石1993a,p.45)。以下の資料は、NSが発話権要求シグナルを使用した例である。資料7では、(1)「いや」、資料8では、(2)「あーあー」が該当し、その後、聞き手だったNSが話し手となっている。

NS　：
NNS　：えーとねー　えー　この　とー　んー　あのー　第２章の補足語で

NS　：　はい　(1)いや
NNS　：すね　あの　補足語という用語が　あのー　普通は　補語　と

NS　：これは　補語、補語という意味で　使ってるんじゃないですね
NNS　：　とも言われる

資料７　NSの発話権要求シグナル

NS　：　うん　はい
NNS　：で　あのー　日本　あのー　日本教育　日本語教育辞典を　あ

NS　：　はい　(2)あーあー
NNS　：のー　調べたら　補語　格という用語があります　でも

NS　：　補足語というのはなかったでしょう　文法用語……
NNS　：補足語　はい

資料８　NSの発話権要求シグナル

一方、今回の資料では、NNSが発話権要求シグナルを使用した例はなく、発話権を獲得した場面は、以下のパタンに限られた。

(1)NSから発話権を譲渡された場合（資料９）
(2)NSの沈黙やポーズ後（資料10,資料11）

NS　：＊＊さんから　ご質問ありますか？
NNS　：　　えーとねー　えー　この

NS　：
NNS　：とー　んー　あのー　第２章の.....

資料９　NNSが発話権を獲得した場面（NSによる発話権譲渡）

NS　：というのもね　覚えておいた方がいいと思いますけどね（沈黙）
NNS　：

NS　：　　はい
NNS　：だから　あのー　えー　一般的に　.....

資料10　NNSが発話権を獲得した場面（NSによる沈黙の後）

NS　：えー んー そう　その字ですね（ポーズ）
NNS　：　　補足語、格、補語、項、そ

NS　：　　はい　補足語と格と項はコンパクトにまとめられて
NNS　：れぞれの定義が

NS　：いるから　覚えやすいですよねー　今みたいに（ポーズ）
NNS　：　　私は あのー

資料11　NNSが発話権を獲得した場面（NSによるポーズの後）

NNSは、NSが資料７、資料８で行っているように、「はい」、「え」等、とりあえず話し手の伝える情報を肯定したり、「いや」と情報を否定したり、「あ」、「あー」と何かを思い出したことを伝えたりするなどして、発話権を握るパタン（発話権獲得シグナルの利用）を知らないため、資料９のように、「相手が発話権を譲ってくれるのを待つ」か、資料１０や資料１１のように、「沈黙やポーズなどの無音区間に飛び込む」方法のどちらかを選択せざる得なかったようである。この点については、追跡調査の都合上、これ以上、NNSにインタビューでの確認を行わなかった。

５．まとめ

母語話者と非母語話者による日本語での談話資料を、先行研究による母語話者同士の談話分析結果と比較し、フォローアップ・インタビューを用いて考察を行なった。

その結果、NNSのあいづち使用について、あいづちの異なり数は、母語話者と同じくいくつかの形式を使い分けていたが、使用形式については、母語話者との違いが見られた。使用したあいづちは、(1)母語の日本語授業で学習したもの、(2)学習者の判断から使用したもの、(3)母語話者から習得したものがあるが、詳細は今後の追跡調査で明らかにしたい。

NNSがあいづちの代わりに使用した様式について、今回の資料からは、「リピートの繰り返し」と「沈黙」が観察され、それぞれについて、フォローアップ・インタビューの結果を基に考察を行なった。また、表面上、母語話者と同じようにあいづちが打たれているが、どの情報に対してあいづちを挿入したのかという意図が、NSとNNS間で、異なっていた場面も観察された。これは、フォローアップ・インタビューを行なうことによって、明らかになった点である。

NSとNNSの意図や解釈の間に、ずれが生じた原因の１つとして、来日したばかりのNNSにとって、母語話者NSの話すスピードが速すぎたこと、

次々と変わるトピックについていけなかったことがあげられる。この2点は、NNSが聞き取りで困難だと感じたこととして、インタビューで述べている。

NSの話すスピードが速い場合、NNSが聞き取って理解した情報の範囲が狭まり、NSがNNSに理解されたと期待する情報の範囲と食い違いが生じる。その結果、資料6であげたように、どの情報に対してあいづちが打たれたのかという解釈に、お互い、ずれが生じる。トピックが次々に変化する場合も同様である。

今後、日本人と接する機会を増やすことによって、NNSに、どのような変化がみられるのか、探っていきたいと思う。

（注1）フォローアップ・インタビューについては、ネウストプニー(1994)が詳しい。被調査者の行動時の意識を「積極的に使うべきだ(p.11)」という研究方法の流れを紹介し、「内省的方法のもっとも代表的なもの(p.12)」として、フォローアップ・インタビューをあげている。また、分析の手順を詳しく紹介した上で、「そのまま現実を代表するものではなく、単なる資料だということを忘れてはならない。(p.21)」と付け加えている。

参考文献

今石幸子(1993a)「談話分析によるあいづちのモデル化の研究」修士論文（大阪大学大学院）

今石幸子(1993b)「聞き手の行動～あいづちの規定条件～」『阪大日本語研究』5　大阪大学文学部日本学科（言語系）　pp.95-109

ポリー・ザトラウスキー(1989)「あいづちとそのリズム」『月刊日本語』3月号　アルク　pp.32-35

ネウストプニーJ.V.(1994)「日本研究の方法論～データ収集の段階～」『待兼山論叢』28　大阪大学文学会　pp.1-24

堀口純子(1997)『日本語教育と会話分析』くろしお出版

松田陽子(1988)「対話の日本語教育学～あいづちに関連して～」『日本語学』Vol.7　No.12　明治書院　PP.59-66

水谷信子(1983)「あいづちと応答」『講座　日本語の表現[3]　話ことばの表現』水谷修編　筑摩書房　pp.37-44

水谷信子(1984)「日本語教育と話しことばの実態～あいづちの分析～」『金田一春彦博士古希記念論文集　第2巻　言語編』三省堂　pp.261-279

水谷信子(1988)「あいづち論」『日本語学』Vol.7　No.12　明治書院　PP.4-11

メイナード泉子(1987)「日米会話におけるあいづち表現」『言語』Vol.16　No.12　大修館書店　pp.88-92

Dittmann, A.T., & Llewellyn,L.G. Relationship between vocalizations and head nods as listener responses. *Journal of Personality and Social Psychology,* 1968, Vol.9, No.1, 79-84

Duncan,S.D.,Jr. Some signals and rules for taking speaking turns in conversations. *Journal of Personality and Social Psychology,* 1972, Vol.23, No.2, 283-292

Maynard,S.K. Analyzing interactional management in native／ non-native English conversation. *IRAL,* 1997, Vol.35／1, 37-60

Yngve,V.H. On getting a word in edgewise, Papers from the 6th regional meeting. *CLS,* April 16-18, 1970, 567-578

（文学部 助手）